

垂水史談会報

第 62 号
2025 (令和 7) 年
2 月発行

【報告】

垂水史談会復活 30 年

史跡研究踏査 (旧垂水城・有馬邸)

2月2日、かねて史跡や文化財は知ってはいるものの、改めて所在地や実物を確認するために、計6名で研究踏査を実施しました。

当日は「麓祭り」が開催されている有馬邸をゴール地点に、9時に荒崎パーキングを出発して踏査を開始。まず国道沿いから殿様水へ下りて、きれいな水の流れを見ましたが、入口付近は年末に市の商工会青年部が草刈りを行い整備されておりました。しかし、場所的に風が吹きよせるところなので、ごみも散見され、定期的な清掃が必要です。

続いて旧垂水城に登って、現在畑に利用されている曲輪(くるわ)から元垂水のまちを望見。垂水の山城の中でも古いもの一つで、山城としての特徴をよく残しており、少なくとも入り口付近に標柱を建てたいものです。

さらに新田神社、耕地整理記念碑、見樹院(げんじゅいん)跡の赤メンドン、田の神さあ第5号を経て三森さんの水源地まで一気に踏査。赤メendonは地元では「イボン神さあ」として親しまれていることから、イボが治癒することもあることながら、その他の病気快癒、さらには疱瘡(天然痘)快癒の信仰まで広げた研究も必要ではないかと考えます。

そのまま川崎川沿いに下り、国鉄大隅線の垂水駅跡の向かい側に空地があつて、庚申信仰の青面金剛像が立っています。60cm×70cmの石像ですが、彫りも比較的はつきりと残っています。庚申信仰は中国道教の影響を受けています。



庚申
仰は庚申
(かのえ
さる)の日の晩にうっかり寝てしまふとその人の体の中の三戸(さんし)という虫が体から這い出て天上に登り、天帝(神様)にその人のかねての悪い行いを告げるのです。そうなたら寿命が縮んでしまふので、人々は夜つびて起きて、



豊かな田園地帯であつただろうと想像されるのです。

奥家の武家門と蔵は手入れが不十分なため、傷みが激しい状況です。蔵は垂水の中でも立派な造りなので手を入れて、喫茶店やお店などに改造したら面白いのだが、との意見もありました。また近くの石敢當は30cmくらいの大きさで道路曲がり角にあります。都合で丁字路から移動させられたような気がします。



その後、垂水高校の旧正門、お長屋を経て有馬邸に到着しました。「かごしま探検の会」の東川隆太郎氏の「垂水麓の土族の家の多くは切り石をもつて石垣が積まれているが、これは明治になって積まれたものであり、有馬邸の石積みは自然石(本城川が山から運んできた花崗岩やホルンフェルス)で積んであつて、古い形を残している」という話を思い出します。

有馬邸にはお昼前に到着。麓祭りの真っ最中で、座敷ではお茶席、戸外では垂水島津家墓所の出土物の展示説明や草鞋づくりなどが開催されていました。今回、史談会として研究踏査を行いました。今後は機会を見て、他の地区、地域でも市民に参加を呼び掛けながら開催したいと思えます。



(瀬角龍平)

三戸に悪行を告げられないように集まって過ごすのが庚申講です。

ところが、青面金剛像が踏みつけている天邪鬼は雑草の種子を畑に振りまくので懲らしめる考え方が濃くなつて、時代とともに農業の神様としての意味合いが強くなりました。ですから庚申像が立つこの辺りは現在、警察の幹部派出所や住宅地が出来ていますが、川崎川下流に当たることから、以前は

宮之城視察研修 ③

最後に、「時吉萬次郎」の故地を2カ所訪れた。時吉萬次郎は、前述の玉利源之助のように、かくれ念仏の指導者で、天保7年(1836)年生まれだから、玉利源之助より少し後の頃である。生家は代々「伯楽(牛馬医)」であり、念仏講のリーダーである「番役」であつた。真宗の取り締まり下にあつて、妻や弟の松五郎は残酷な拷問の末に命を落としている。さて、真宗の「阿弥陀仏の前では人間誰しもが平等である」という思想は、封建社会の世にあつて、特に被差別階級の人々の救いや慰めになったわけだが、鹿児島も同様である。



そもそも土身分内でさえ、城内と外城に厳然たる差別があったわけだが、鹿児島における被差別部落およびその特質は全国的に見ても独特で、おおまかに「慶賀(村)」とよばれる人

たちと「死苦(村)」といわれる人たちとに分かれる。

「慶賀」は「けいが」「けが」「けんご」等とよばれ、郷と村々の警備、牢番人や罪人の逮捕と護送、刑の執行などにあたらせつつ、島津家はじめ一族の慶祝の行事にかかわっていたため「慶賀」と言う。『新田神社文書』には、島津家の学問所という役割を担当していたという記録があり、『庄内地理誌』を見ると、もともと差別されていたにもかかわらず、いつのころからか差別されるようになったと記されている。



「死苦」は、「四苦」「四衢」とも書かれ、解放運動の側からは「志苦」の文字があてられている。それぞれの文字は当て字ではあるが、「死苦」「四苦」などの字には象徴的なものがある。その仕事は、死牛馬の処理や、皮革、骨などの細工にかかわっており、また下駄、草履などの製造にも従事していたという。

ちなみに、この「死苦村」は、天明4(1784)年に「穢多村」と名が変えられている。慶賀村・四苦村は、100余の郷のほとんどに1つ乃至2つおかれていた。

萬次郎は伯耆の職で活躍の場は宮之城に留まらず、広域に及んだ。その確かな腕と人柄、また宗教的人徳が、身分制度の壁を越えて多くの人々から尊敬を集めた。現に妻は武士身分から嫁いできている。



所と顕彰碑が、宮之城屋地の東谷墓園にある。さっきの仏飯講についての或る看板もそうであったが、「あらゆる差別をなくす鹿児島県民会議」がこの石碑の建立や記念事業をされてきたとのこと。

さて、その墓地から望む山が、萬次郎が役人から逃れて潜んだという山なのだが、墓地からの道は

もはや草木に覆われ荒廃しているのとこのとで、別ルートから、故地「萬次郎岩」へ向かった。



萬次郎岩は萬次郎が詮索の追っ手を逃れ、潜伏した岩ぐらなのだが、道中が思ったよりも険しいものだった。山の尾根を伝うように5分ほど歩き、最後には木にロープを結んで、滑落到ちを避けながら恐る恐る岩肌を下った。

宮之城の視察は、史学的観点はもちろん、人権学習として大いに実があったものであった。自然豊かで風光明媚な情景に心も癒された。山田さんはお土産に山太郎ガニを購入されていた。無事においしく頂かれただろうか。次回はぜひほかの史談会メンバーもともに訪れたい。

なお、萬次郎所持の「地獄極楽図」が真宗大谷派鹿児島別院に常設展示されているので、その写真も載せておく。

— 終わり —
(中谷潤心)

《垂水の方言と言い回し》 その②

(境地区)

とえとけ おさいじゃした ゆつくいとしやつたもんせ・・・遠い所へいらつしやいました。ゆつくりと休んでいて下さい。よかとけきやした かせをしつくいやんせ・・・良いところへきてくださいました。手伝いをしてください。

あいがとさげました おかげさあでたつかいもした・・・ありがとうございます。うございしました。おかげさまで助かりました。

こあ うんめころつ かいもじゃね・・・これはとても美味しいサツマイモですね。ー

そげな わいこつすえや じゅんささあがごわつど・・・そのような悪いことをすると 警察官が来るよ。

しつきゃんが もどつこつではよ ぶえんをもらつて・・・巻き網漁船が 帰ってくるから 早く行って生魚をもらってきて。

きゅや ひよいがえで そんなへんぬ ころつみろかい・・・今日は 天気がいいから近辺を 歩いて見ようか。

(隈元信)

(垂水麓・大野原) 地区

「そげなこつ おしやしたとな てんがねかしたなー」

(そんなことをしたの？かんばつたねえ)「麓で使われていた。

「おつこいよーオ」、「あいや、あいや」、「まこてーえ」、「うんいや、うんいや」

「あらまあ、どうしましょう」という感嘆詞で、会話の最初にはく言葉。

「まこて 所帯だましがいつてなあー、すつぱい さぜやつめ 終いにや 柱ずいもつちこそな あんべじゃが」

結婚したとたんに節約する娘が、実家に帰って、何でも持って帰る。

「まこてーえ むひなげもんじゃねーえ」「むひね子じゃっ、どしたこつかよ」

心の奥底から出た同情の「かわいそう」という意味

「まこて てんがねもんじゃ」

子どものころ、家の手伝いをするとはめてくれた。「本当に感心だ」の意。

(川崎あき子)